トーマス・ハーデイが描いた「新しい女」

清　水　輝　雄

序　論

トーマス・ハーデイ (Thomas Hardy) が生れ，成育し，小説家として活躍したビクトリア女王時代（1837年—1901年）の英国は物心両面共著しい変化を見せた時代であった。それを端的に表現しているのは次の言葉であろう。

The one distinguishing fact about the time was "that we are living in an age of transition."

（その時代についての一つの目立った事実は「我々が変遷の時代に生きている」ということであった。）(注1)

先ず物質的な面では18世紀後半に始まった産業革命が工業生産の急激な増加，それに伴う商業の発達，都市への人口の移動等それまでに例を見ない社会機構全般にわたる大変革を英国にもたらした。その結果英国は政治的，経済的に飛躍的発展を遂げ，国威が大いに高揚されると共に精神面においても国民は誇りと自信に充ち，確立された道徳観の下に安定した生活を営み正に英国は黄金時代を迎えた観があった。

しかしこの表面の華やかさと安定の裏には急激な発展がもたらした各種のひずみが隠されていた。即ち貧富の差の拡大，人口流出や農産物の輸入による農村の衰微，都市労働者の貧困等の諸問題が次第に表面化し，精神面でもこれらの事態に伴って道徳観の退廃が進み，それに自由平等思想の

浸透が加わって不安動揺の様相が現われて来た。既に1830年代に

a new "atmosphere of unrest and paradox hanging around many of our ablest young men of the present day."

(「当節の多くの最も有能な青年達の周辺には不安と矛盾の新しい風潮がただよって」)(注2)

いたのであるが，ビクトリア女王時代の中期から世紀末にかけてこの不安感は次第に度を増していった。

18世紀に既に芽生えていた婦人解放運動もこのような雰囲気に助けられて勢いを加えていった。18世紀末にM. ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft) が「婦人の権利の擁護」(注3)という本を出しているが，当時はまだ機が熟しておらず一般の人々の注意を惹くには至らなかった。ビクトリア女王時代に入ってもまだ「家庭の天使」(The Angel in the House)(注4)が婦人の理想像とされ，夫への奉仕，家事の切り盛り，子供の養育だけが婦人に求められた役割であった。そして一旦道を踏み外すと「堕落した女」(fallen woman) として社会から完全に閉め出されてしまうのだった。これは有識階級の間にも広く定着していた女性観であったが，19世紀中葉になると婦人解放運動の盛り上がりによってこの女性観も影響を受けるようになった。その気運に強い刺戟剤となったのが1868年に刊行されこの運動のバイブル (the bible of the feminists)(注5)と言われるJ.M.ミル (John Stuart Mill) の「婦人の隷従」であった。次いで1880年に「新しい女の宣言」(a manifesto for the New Woman)(注6)と呼ぶにふさわしいイプセンの「人形の家」が発刊されるに及んでこの風潮は急激に社会に浸透していった。そしてその影響を受けて1880年代から90年代前半にかけて英国文芸界には婦人解放運動の具象画とも言える「新しい女」をテーマにした小説が新進作家達によって続々と発表され，広く大衆に読まれた。それらは何れも大同小異の作品で，大胆な筆致で性の解放，未婚の母，離婚の自由等を讃美しており，保守的道徳観を保持する階層の人々のはげしい非難を浴びた。

このような動きの中にあって既成作家達もそれぞれの立場からこの問題に関心を持ち，作品のテーマとして取上げたのも当然の成行きであったと言える。G. メレデイス (George Meredith) やG. ギッシング (George Gissing) にもその例が見られるが．ハーデイの場合はどうであろうか。言うまでもなくハーデイは女性の描写に傑出した才能を示し，その作品はほとんどすべて男女間の愛情問題をテーマとしている作家であり，彼が「新しい女」に興味を抱かないはずはなかった。更に彼は若い頃ミルの「自由論」を愛読し，その演説を聞いて感銘を受けたことや(注7)イプセンの劇の上演を見ている事実から彼等の影響を受けたことも当然考えられる。彼がかなり以前から「新しい女」に興味を感じていたことは彼の手紙の中の次の文章がはっきり示している。

Sue is a type of woman which has always had an attraction for me, but the difficulty of drawing the type has kept me from attempting it till now.

（シューはずっと私の注意を惹いて来たタイプの女性ですが，そのタイプを描くのがむずかしいので今日まで差し控えていたのです。）(注8)

このシューは「新しい女の小説」(New Woman Fiction) の代表作の一つとしてあげられるハーデイの小説「日かげ者ジュード」（1895年刊）のヒロイン—スザンナ・ブライドヘッド (Susanna Bridehead) で，彼が描いた「新しい女」の頂点に立つ人物であるが，これに先立ついくつかの彼の作品にも既に「新しい女」の片鱗が現われている。

しかしハーデイは前記の新進作家達が描いた「新しい女」像には余り好意を抱いていなかった。それは徒らに知識をひけらかし，自己主張をする女—G. B. ショー (George Bernard Shaw) が「女らしからぬ女」(Unwomanly Woman) と呼んだもの—であったが，ハーデイが描こうとした「新しい女」はそれとはほとんど異質とも言うべきものであった。彼は性や結婚の問題の本質に触れて女性の微妙な心理の深層をさぐろうと試みたのであった。それは新しい小説の領域に一歩踏み込んだ試みであり，やが

て彼の作品がD. H. ロレンス (David Herbert Lawrence) の注目を惹き，その作品に影響を与えることになった所以でもある。

次章以下においてハーデイが描いた「新しい女」の系譜をたどって考察を加えてゆくことにする。

第1章　ハーデイの小説のテーマと「新しい女」

ハーデイの主要小説のテーマは何れも人間と環境—彼の場合それは地域社会の慣習を意味している—の対立をたて糸とし，男女間の愛情のもつれを横糸として織りなされるものである。そしてそれが彼の宿命的人生観を反映した暗い雰囲気の中で展開されてシエークスピアの作品にも迫る悲劇感をかもし出し，英文学史上類例を見ない小説となっている。

このたて糸になっている人間と環境の対立関係はD. H. ロレンスの「ハーデイ論」の次の言葉の中に要約されていると言える。

This is the theme of novel after novel; remain within the convention, and you are good, safe, and happy in the long run,—or, on the other hand, be passionate, individual, wilful, you will find the security of the convention as a walled prison, you will escape, and you will die; either of your own lack of strength to bear the isolation and the exposure, or by direct revenge from the community, or from both.

（これが彼の小説で次から次へと繰り返えされるテーマである。慣習のわく内に留まれば結局は善良，安全，幸福になれるが…一方情熱的，個性的，恣意的になれば慣習による保護は壁で囲まれた牢獄のように感じられてそこからの脱出を図り，やがて孤独と暴露に耐える力を欠いでいるか，または社会の直接的復讐からか，あるいはその両方の原因で死に至るのである。）(注9)

そしてこれらの情熱的，個性的な主人公達を破滅に追込む地域社会の慣習が彼の小説では往々にして物語の舞台になっている自然界の風物に姿を変えて登場するのがハーデイ独特の技法である。自然界は背景の地位に留まらず，物語の中に入り込んで人間の運命を支配する造物主 (First Cause) の役割さえ果すのである。その典型的な例は「帰郷」の舞台であるエグドン荒野 (Egdon Heath) であろう。そこに住む人々は生活の隅々に至るまで荒野の支配下に置かれ，それに甘じる人々には安住の地となるが，情熱的で自主心の強いヒロイン—ユーステイシア (Eustacia) は牢獄のような荒野の生活に飽き足らず，パリーの生活を体験して帰郷したクリム (Clym) に眩惑され，策をろうして彼と結婚するが，それも幻滅に終り絶望の果暴風雨の夜荒野からの脱出をはかり増水した井ぜきに落ちて溺死してしまう。読者の眼には彼女が荒野自らの手によって反逆者として罰せられたように映り，一層悲劇感が高められる。

このユーステイシアのように「情熱的，個性的で恣意的」な女がその環境の抑圧に我慢できず殻を破って脱出し，自分の願望を実現しようと—ロレンスの言葉を借りれば「自己を達成」(to attain herself) しようと—図って空しく破滅の道をたどる女，それがハーデイが意識的に描いた「新しい女」の最初の姿であった。

第2章　ハーデイの「新しい女」の系譜

前記の通りハーデイの「新しい女」がはっきりした形で最初に現れたのは「帰郷」のヒロインのユーステイシアと考えられるから彼女の本質をもう少し詳しく検討してみることにしよう。

彼女がエグドン荒野の円形塚の上に夕暮の薄明りを背にして立つ姿を描いた次の文章

The scene was strangely homogeneous, in that the vale, the upland, the barrow, and the figure above it amounted only to unity.…The form was

so much like an organic part of the entire motionless structure that to see it move would have impressed the mind as a strange phenomenon.

（谷と高台と塚とその上に立つ人影が単一体になりきっているという点でその風景は不思議な程均一質のものという感じだった。…その人影は動かない構造物の一部をなすもののように見え，それが動きでもしたら不思議な現象として心に映ったことだろう。」(注10)

を読むと彼女は全く荒野の風景にとけ込んでおり，彼女を「荒野の女王」—ハーデイは「夜の女王」(Queen of Night) と言っている—とでも呼びたくなるが，実際には彼女は荒野には縁の浅い外来者である。ギリシア人を父とし英国人の船長の娘を母として生れ，両親が若死にしたためこの荒野に引退している祖父の船長の許に引取られているのだ。彼女は荒野の単調な生活を嫌い都会への脱出を切望している。次の描写から彼女の情熱的，積極的な性格がうかがわれるであろう。

To be loved to madness—such was her great desire.

（気が狂うほどに愛されること——それが彼女の熱望だった。）(注11)

Fidelity in love for fidelity's sake had less attraction for her than for most women:…

A blaze of love, and extinction, was better than a lantern glimmer of the same which should last long years.

（彼女は貞節のための貞節には大多数の婦人達ほど魅力を感じなかった。…パッと燃えあがって消える愛情の方がちょうちんの灯のように永く続く弱い愛情よりよかった。）(注12)

このような性格の持主であるユーステイシアがパリーからクリムが帰郷した時あこがれのパリーの栄光に眩惑され，荒野からの脱出の夢を彼との結婚に托したのも当然の成り行きであった。前記の通り彼女は積極的に策を

講じて彼に近づき遂に結婚するが，期待に反して彼はパリーに帰ろうとはせず，荒野に留まって住民の啓蒙に一生を捧げる決意を変えない。彼女は夢が破れ荒野でのみじめな結婚生活で失望のどん底につきおとされる。遂に彼女は暴風雨の夜夫のクリムを見捨ててひそかに荒野から出奔しようとするが，増水した井ぜきに落ちて水死する。失望の果の投身自殺とも考えられる。

それまでのハーデイの作品のヒロイン達はほとんどが気の弱い移り気な女であったが，ユーステイシアはそれとは違った女，ロレンスの言葉通り「情熱的，個性的，恣意的」な女で，ハーデイ自身も彼女を

Thus she was a girl of some forwardness of mind, indeed,…very original. Her instincts towards social nonconformity were at the root of this.

（このように彼女はやや進歩的な考えの女で，本当に…独創的であった。社会的慣習に反抗しようとする本能的傾向がその基となっていた。）(注13)

と評しており，「新しい女」として彼女を意識していることがうかがわれるが，彼女を「新しい女」としてはっきり位置づけているのはロレンスの次の言葉であろう。

What does she want? She does not know, but it is evidently some form of self-realization; she wants to be her herself, to attain herself.

（彼女は何を求めているのか？　彼女自身にも分らないが，それが何等かの形の自己完成であることは明白である。彼女は自分自身であること，自分自身を達成することを望んでいるのだ。）(注14)

ユーステイシアに続くハーデイの「新しい女」の試みは「森に住む人々」（1878年刊）のヒロイン―グレース (Grace) である。彼女はヒントック (Hintock) の森で生れ育った娘で親同士が許婚者と決めていたジャイルズ (Giles) と同様生粋の森の子であったが，町の学校に送られて教育され

たため帰郷しても森の生活から浮きあがって「よそ者」になっている。ジャイルズが契約更新の手続の手違いから土地，家屋を地主に取りあげられると彼女は父親の勧めに従って彼を見捨てて医師のフイツピアズ (Fitzpiers) と結婚してしまう。しかしこの医師は浮気者で間もなく地主のチヤーモンド (Charmond) 夫人と親しくなり一緒にヨーロッパに旅立ってしまう。グレースは彼との結婚を後悔し，誠実なジャイルズの真価に目ざめる。丁度その頃彼女の父親が離婚に関する新法が制定されるという噂を聞いて来てグレースに不幸な結婚を解消してジャイルズと再婚するように促がす。彼女もその気になって行動するが，やがてその噂は誤聞で彼女の離婚は不可能と分かる。そこへチヤーモンド夫人と死別したフイツピアズが再び戻って来る。グレースは夫との再会を拒否し，今は森の中の小屋にこもって病気の療養をしているジャイルズの許に救いを求めて逃れる。彼は小屋を彼女に提供し，自分は病身を風雨にさらして病死してしまう。

グレースの場合はユーステイシアのように「自分自身の達成」を図ろうとする積極的な「新しい女」と言うよりはむしろ初期の作品のヒロイン達と同じく移り気の弱い女という印象を受けるが，誤った結婚から自分を解放しようとし，夫が帰国した時彼の許に戻らずジャイルズに救いを求めた決断は当時の伝統的道徳観から見れば極めて大胆な行動と言うべきであり，グレースも「新しい女」の系譜に加えるに価する人物であると言えよう。

またこの作品は当時論議の対象となっていた離婚問題にハーデイが関心を寄せていたことを立証するもので，次の言葉に示された彼の理念に基いて当時の離婚法規を批判した問題小説と言える。

My opinion at that time, if I remember rightly, was what it is now, that a marriage should be dissolvable as soon as it becomes a cruelty to either of the parties…being then essentially and morally no marriage….

(当時の私の意見も私が正しく記憶しているとすれば現在の意見と変っていない。即ち結婚は当事者の何れか一方を苦しめるものとなればす

ぐに解消されるべきものである…それはもはや本質的にも道徳的にも結婚ではないのだから…ということである。)(注15)

次にハーデイの作品中最も広く読まれている「ダーバービル家のテス」(1891年刊)のヒロイン—テス(Tess)の場合を考えてみよう。テスの家は今は落ちぶれているが,由緒ある旧家ダーバービル家の子孫らしいと牧師から教えられて単純な両親はそれをすっかり信じてしまう。そしてダーバービル家を偽称する富裕な一族を本当の親戚と思い込み経済的な援助を期待してテスをあいさつにやる。彼女はその家族の一員であるアレック(Alec)に誘惑されて妊娠してしまう。家に帰って出産するが,その子は間もなく死に,テスは酪農場に働きに出てそこで牧師の子のエンゼル(Angel)と出会い相愛の仲となって遂に婚約するが,結婚式の当日彼女が過去の過失を告白するとエンゼルは彼女を捨てて南米に渡ってしまう。彼女は耐えがたい苦難に耐えて働きながらひたすら彼の帰国を待ちわびるが,何の音信もなく窮迫した家族を助けるため自ら犠牲になって再びアレックの世話になる。そこへエンゼルが帰国して訪ねてくる。テスは思い余って発作的にアレックを刺し殺してエンゼルと一緒に逃亡するが,間もなく捕えられて絞首台で薄幸な一生を終るのである。

テスが身に降りかかる各種の困難に敢然と立ち向って生き抜いてゆく姿からは自立心が強く個性的な性格の印象を受けるが,実状は無責任な両親と多くの弟妹を抱え,一家の柱としてそうせざるを得なかったのであり,自覚に基いた積極的な行為とは言えない。彼女は自分を見捨てた夫にあくまでも貞節をつくす女で,むしろ伝統的道徳観にしばられた「旧い女」の色彩が強く,「新しい女」の仲間に数えることはできないであろう。L.フェルナンド(Lloyd Fernando)の次の言葉がテスの本質を適切に表現している。

She lived and moved chiefly an emotional, not a cognitive level. She revealed no hint of intellectual restlessness;… she expected little or no choice over fate.

（彼女は主に知的次元でなく情緒的次元で生き，行動した。彼女は知的不安定のきざしを全く示さなかった。…彼女は自分の運命に関して全く選択権がないか，あっても極めて少ないと思っていた。）(注16)

しかしこの小説には「新しい女」を考える立場から見逃し得ない問題がある。それはハーデイがこの作品に「清純な女」(A Pure Woman) という副題をつけていることである。当時の社会通念では「清純」という観念とは凡そ相容れないテスにわざわざこの副題をつけたのは今や作家としての地歩が確立して世評に拘泥する必要のなくなった彼が非難を覚悟の上で自分の信じる新しい道徳観を社会にぶっつける意図から出たものである。彼は作品中の次の文章からもうかがえるようにテスの過失を弁護する立場をはっきりととっている。

Whatever her sins, they were not sins of intention, but of inadvertence, and why should she have been punished so persistently?

（彼女の罪がどんなものであるにもせよ，それは彼女が意図的に犯したものではなく，不用意に陥ったものである。それだのに何故そんなにしつこく彼女は罰せられねばならないのか？）(注17)

このようにこの作品は「新しい女」という観点から見ればヒロインのテス自身よりは作者ハーデイが彼女を弁護する態度の中に彼の「新しい女」観がうかがわれる点で意義を持つ作品である。

これまでハーデイの「新しい女」の系譜をたどって来た範囲ではどのヒロインもまだその片鱗を示しているに過ぎず，本格的な「新しい女」は次の作品「日かげ者ジュード」のヒロインのシューの出現を待たなければならない。

第3章　シュー（スザンナ・ブライドヘッド）について

シューをヒロインとする「日かげ者ジュード」は1894～95年に雑誌に連載されたものであるが，前述の通り英国では1880年代後半からイプセンの「人形の家」の上演，世論を沸かせたパーネル離婚事件，新進作家達の手になる大胆な描写の小説等の影響で「新しい女」について異常に関心が高まっていた。その気運の中でそれまで構想を練っていたハーデイが自分の「新しい女」像を世間にぶっつけたのが「日かげ者ジュード」であった。

この作品でも一方では環境との対立，即ち大学進学を熱望するジュードが伝統の厚い壁に阻まれて挫折するというたて糸があるが，ノイローゼとも言えるデリケートな感覚をもつシューの変愛，結婚観に基づくジュードとの関係という横糸が興味の中心となり，読者の関心もその方に集中される。この作品にはハーデイが得意とする荒野や森といった自然描写がほとんど姿を見せないのも彼が人物描写に全力を傾倒していることを示すものに他ならない。

ここで先ず「日かげ者ジュード」の荒筋をたどってみよう。主人公ジュードは幼い頃孤児となり田舎の大叔母に引とられているが，学問に興味をもち，大学に進んで牧師になることを願い，独学でラテン語等を学ぶ。一方生計の手段として石工の修行をするが，一時の情熱に馳られて粗野で扇情的なアラベラ (Arabella) と結婚してしまう。間もなく彼女は生活力の弱いジュードに満足できず両親とオーストラリアへ渡る。やがてジュードは目指す学園都市クライストミンスター (Christminster) に出るが，独学の彼には大学の門は開かれない。そのうちに彼はそこに住む従姉妹のシューにめぐり会い，アラベラとは正反対に鋭い知性をもつ彼女に惹かれてゆく。シューは以前ジュードの先生だったフイロットソン (Phillotson) の助手となり，そのすすめで教員養成所に入学する。フイロットソンも彼女に好意を抱くようになり，彼女は深く考えずにその求婚を受入れて卒業後に結

婚することを承諾する。その後ジュードがアラベラとの結婚のことを告白したことで今では彼に心を寄せるようになっていたシューはショックを受け，衝動的にフイロットソンと結婚式をあげてしまう。それは名目だけの結婚だったが，シューはそれにも耐えられず，飛び出してジュードの許に同居する。そこへアラベラが突然帰国してジュードを訪ねて来たことから嫉妬に馳られて彼と夫婦関係に入るが，どうしてもシューは正式の結婚手続には同意しない。その後アラベラがジュードとの間の子で母親の許に預けていた男の子を養育してくれと送り届けてくる。シューは自分達の間にできた子供と一緒にこの子も手厚く養育するが，正式に結婚していない彼等夫婦に対する世間の批判の眼はきびしく，まともな職にもつけず，下宿さえ断られる仕末で伝統的道徳観のもつ力の強さをまざまざと見せつけられる。その窮状を見てアラベラの子が自分達子供さえいなければ両親は楽になれると思い，シューの子供を道ずれに自殺してしまう。この事件のショックでシューはすっかり変って別人のようになり，自分は正規の結婚による夫フイロットソンの許に戻るべきであると言ってジュードの懇願を押しきって帰ってしまう。ジュードも自暴自棄になり再びアラベラと一緒になるが，長い間の苦労がたたって病気になり，クライストミンスターの町が祭典で賑う最中に誰にもみとられずに自分の生れた日を呪いながら死んでゆく。

以上がこの小説の荒筋であるが，ハーデイはその中で当時のいわゆる「新しい女の小説」が最重点問題としていた離婚の自由や性の解放についてシューにもそれらの作品に見られるのと同じような内容の発言をさせているのが目につく。その例を一二あげてみよう。

"Why can't we agree to free each other? We made the compact, and surely we can cancel it…not legally of course; but we can morally,…"

（「何故私達はお互いに相手を解放することに同意できないのでしょうか。私達が結婚の契約をしたのだから，それを解消することも確かにできるはずです…勿論法律的にではなく道義的に…」）(注18)

"I may hold the opinion that in a proper state of society, the father of a woman's child will be as such a private matter of hers as the cut of her under- linen…."

(「正当な状態の社会では子供の父親が誰であるかは女性の下着のカットと同じようにその女性の個人的な問題だという考えを抱いてもよいのです。」) (注19)

しかしこれは当時の風潮を反映しただけのものでハーデイの真意を表わすものとは思われない。彼が当時の小説に描かれた「新しい女」像に余り好感を寄せていなかったのは前述した通りであるが，同じくシューに言わせている次の言葉が彼の本心を代弁していると見るべきであろう。

"I hate to be what is called a clever girl—there are too many of that sort now."

(「私は世間で言われている賢い女になることは大嫌いです—この頃そういった類の女が多すぎる程たくさんいます。) (注20)

ハーデイがこの小説で描こうとしているのは離婚というような外に表われた形式的な問題よりはむしろその奥にひそむ微妙な女性心理を解明しようとしたのである。従ってシューは当時の社会通念の「新しい女」とは異質のものと言えるタイプの「新しい女」である。彼女はノイローゼと言ってもよい程せん細な感覚の持主で批評家の評言通り肉体のない「神経の束」(bundle of nerves) のような女であり，結婚の問題についても彼女の立場は伝統的な結婚制度そのものに対する心理的反撥と言うべきものである。彼女は言っている。

"Their views of the relations of man and woman are limited …. The wide field of strong attachment where desire plays, at least, only a secondary part, is ignored by them."

(「男女関係について世人の見解は偏狭なものです。…欲望が少くと

も二次的な役割しかしていない強い愛情の広い分野があるのが無視されています。」)(注21)

そしてジュードと同居しながらも実質的な夫婦関係はなく，両人共前の結婚の解消が成立して再婚が可能になってもシューはどうしても手続をとることを納得しない。結婚の制約がもたらす心理的な圧迫を恐れていたのである。次の言葉からそれがうかがわれる。

"I have just the same dread lest an iron contract should extinguish your tenderness for me, and mine for you, as it did between our unfortunate parents."

(「きびしい（結婚の）誓約があなたの私に対する，また私のあなたに対する愛情を消してしまうのではないかと（以前と同様に）恐れているのです。丁度私達の不幸な両親の間がそうであったように。」)(注22)

しかしさすがにシュー自身も自分の気持が一般の世人に理解されにくいことを認めている

"So few could enter into my feeling…they would say 'twas my fanciful fastidiousness, or something of that sort,and condemn me…."

(「私の気持にはいり込める人は少数しかいないでしょう。人々は問題を私のたわいない潔癖感か，それに類するもののせいにして私を非難するでしょう。」)(注23)

そして彼女はこのように自分の意見を固執したことによって彼女自身は気付いていなかったが，大きな代償を支払わねばならなかった。それを簡潔に表現しているのはS．P．プラサド (Suman P. Prasad) の次の言葉である。

She has received intellectual emancipation, but at the cost of the suppression of feminine traits…. She tortures herself and her partner.

（彼女は知的解放は獲得したが，それには女性的特性を抑圧するという代償を必要とした。…そして（それによって）彼女は自分自身および彼女の相手を苦しめることになるのである。）(注24)

正にこの言葉の通り彼女は相手のジュードを絶望の果破滅へと追込み，彼女自身も苦悩の道を歩くことになった。ここで我々はハーデイが伝統の厚い壁に挑戦する「新しい女」に共感と同情を示しながらも一方ではその行き過ぎがもたらす不幸な結果の実例を示して彼女達に鋭い批判の刃を向けていることに気付くのである。

更にまたハーデイはこの作品の中で「新しい女」のもつ意外な脆さを描いていることも注目に価する。それはシューの嫉妬心である。アラベラがオーストラリアから帰国した時シューはジュードが自分から離れてゆくのを妨げようとして彼と夫婦関係を結ぶ。彼女は自分の信念に反したこの行動を弁解して

"I never deliberately meant to do as I did. I slipped into my false position through jealousy and agitation."

（「私は意識的に行動したのではありません。嫉妬と動揺から誤った関係に陥ったのです。」）(注25)

と言うが，これを契機として「新しい女」シューはロレンスの比喩を借用して表現すれば

The Sue that had been till then, the glimmering, pale, star-like Sue died.

（それまでのシュー，青白い光を放つ星のようだったシューは死んでしまった。）(注26)

のである。今や平凡な一人の女性に戻った彼女には以前なら敢然と反撥したであろうと思われる周囲の社会の批判の眼も耐えがたいものとなって来

た。それに追打ちをかけるように子供達が自殺した時彼女は打ちひしがれて子供達の死は過去の自分の言動に対する天罰であるとして責任をすべて自分に帰して苦悩する。彼女は

"I wish my early fearless word and thought could be rooted out of my history…."

(「私の昔の恐れを知らない言葉や思想を根こそぎ引抜くことができればよいのに」) (注27)

と願い，ジュードが必死に引留めるのを振り切って初めの夫の許に戻って改めて結婚式をあげる。

このシューの意外な行動は「新しい女」としての彼女を知る者にとっては到底理解できないことであろう。子供達の自殺という事件のショックで自信を失い，伝統的な道徳観の中に心の安らぎを求めたというだけの解釈では我々の疑念を納得させるだけの力はないであろう。これはA. J. ゲラード (Albert J. Guerard) が指摘しているようにハーデイが「新しい女」の座から転落したシューを新しい小説の重要なテーマである自己破壊(self-destruction) の衝動の試みとして取り上げたものと見るべきであろう(注28)。彼女が罪の意識にさいなまれ，自分を笞打って破滅への道をたどろうとする姿が次の言葉にはっきり表われている。

"Our life has been a vain attempt at self-delight.…We should mortify the flesh…the terrible flesh."

(「私達の生活は自分の快楽の虚しい追求でした。私達は肉体…恐るべき肉体を苦しめるべきです。」) (注29)

"Self-renunciation…that's everything! I cannot humiliate myself too much. I should like to prick myself all over with pins and bleed out the badness that's in me!"

(「自己否定…それだけです。私は自分をどんなに辱かしめてもまだ

足りません。私はピンで全身を突き刺して私の体内にある悪をしぼり出したいのです。」)(注30)

そしてそのクライマックスが彼女が愛情を感じていない初めの夫の許に戻って夫婦生活に入ることであった。それは彼女にとってはロレンスの言葉通り

She chose the bitterest penalty.

(彼女は最もきびしい刑罰を選んだ。)

のであり，それは完全に自分を葬り去る行為であった。

一方ジュードも絶望のどん底にある自分を評して

"…a paltry victim to the spirit of mental and social restlessness, that makes so many unhappy in these days!"

(「…今日多くの人々を不幸に陥し入れている精神的，社会的不安の時代思潮のとるに足らない犠牲者」)(注32)

と言っているが，シューも同じくその犠牲者の一人である。更にまた彼は言っている。

"The time was not ripe for us. Our ideas were fifty years too soon to be any good to us."

(「私達にとって時機がまだ熟していなかった。私達の考えが役に立つにはまだ50年早すぎた。」)(注33)

この言葉通りシューとジュードの考えは時機尚早で伝統の厚い壁に阻まれて不幸な結末に終ったのであるが，彼等の実験—それは換言すればハーディの「新しい女」の実験であるが—は無駄ではなかった。それは50年を待つことなくロレンスに認められてその作品の中に実を結んだと言えるからである。そしてシューはロレンスに

"One of the supremest products of our civilization is Sue, and a product that well frightens us."

(我国の文明が生み出した最もすぐれた産物の一つがシューであり，しかも我々に恐怖を与える産物である。)(注34)

と言わせているのである。

結　び

これまでハーデイが描いた「新しい女」の系譜をたどり，その頂点に立つシューに至るまで考察して来たが，「日かげ者ジュード」が発行された1895年はたまたま「新しい女の小説」の転換点でもあった。この前後に大胆な描写で男女関係を扱った大同小異の小説が数多く発行されたため一般読者には飽かれ，伝統的道徳の崩壊を恐れる人々からははげしい非難を浴びてその種の小説は次第に姿を消していった。そして20世紀に入ると婦人の問題は専ら婦人参政権運動に関心が向けられるようになった。

この間にあって「日かげ者ジュード」は老大家ハーデイの手になる作品だけに特にきびしい攻撃にさらされたが，前述の通りこの作品は普通の「新しい女の小説」のように性の解放や離婚の自由といった外面的な問題を重点にしたものではなく，伝統の重圧と新しい思想のはざまに苦悩する人達の心理分析を主眼としたものであり，E．ゴス (Edmund Gosse) 等の識者はその本質を理解し高く評価していた。そして20世紀に入ると間もなくロレンスがハーデイの作品に注目してユニークな批評書「ハーデイ論」を執筆し，更にその小説の素材の一部にハーデイのヒロインが取り入れられていることは批評家達がはっきり指摘している処である(注35)。これらの事実からハーデイの「新しい女」は新しい小説への試みとしても意義ある実験であったと言えるであろう。そして我々は批評家の比喩を借用して表

現すればハーデイが

…struggling furiously in the marshes that separate the nineteenth century from the twentieth.

(…19世紀と20世紀を隔てている沼地の中で必死にもがいている)(注36)

作家であったことを知るのである。

注

(1) The Victorian Frame of Mind (Walter E. Houghton p. 1.)
(2) ibid. (p.8.)
(3) Vindication of the Rights of Woman (Mary Wollstonecraft)
(4) The Victorian Frame of Mind (p. 341. the title of Coventry Patmore's poem)
(5) The New Woman and the Victorian Novel (Gail Cunningham p. 7.)
(6) New Women in the Late Victorian Novel (Lloyd Fernando p. 130.)
(7) The Life of Thomas Hardy (Florence E. Hardy p.330.)
(8) ibid. (p.272–3.)
(9) Study of Thomas Hardy (Phoenix II: D.H. Lawrence p.411.)
(10) 「帰郷」(第1巻第2章)
(11) (12) (13) 「帰郷」(第1巻第7章)
(14) Study of Thomas Hardy (D.H. Lawrence p.414.)
(15) 「日かげ者ジュード」(序文後書1912年)
(16) New Women in the Late Victorian Novel (p.142–3.)
(17) 「ダーバービル家のテス」(第6部第51章)
(18) 「日かげ者ジュード」 (第4部第3章)
(19) 〃 (第4部第5章)
(20) 〃 (第2部第5章)
(21) 〃 (第3部第6章)
(22) 〃 (第5部第1章)
(23) 〃 (第4部第2章)
(24) Hardy and D.H. Lawrence (S.P. Prasad p. 132.)
(25) (27) (29) (30) 「日かげ者ジュード」(第6部第3章)
(26) Study of Thomas Hardy (D.H. Lawrence p.504.)
(28) Thomas Hardy (A.J. Guerard p.112.)

(31) Study of Thomas Hardy (D.H. Lawrence p. 509.)
(32) 「日かげ者ジュード」（第6部第1章）
(33) 〃 （第6部第10章）
(34) Study of Thomas Hardy (D.H. Lawrence p. 497.)
(35) Irving Howe; Ian Gregor; Richard Swigg; S.P. Prasad, etc.
(36) Thomas Hardy: After Fifty Years (Edited by Lance St John Butler p.120.)

（付録1） 引用小説リスト

（題　名）	（刊行年）	（和訳名）
The Return of the Native	1878	帰郷
The Woodlanders	1887	森に住む人々
Tess of the d'Urbervilles	1891	ダーバービル家のテス
Jude the Obscure	1895	日かげジュード

（付録2） 引用文献リスト（刊行年順）

	（題　名）	（著者名）	（刊行年）
(1)	The Life of Thomas Hardy	Florence E. Hardy	1928
(2)	Study of Thomas Hardy (Phoenix II)	D.H. Lawrence	1936
(3)	The Victorian Frame of Mind	Walter E. Houghton	1957
(4)	Thomas Hardy	Albert J. Guerard	1965
(5)	Thomas Hardy	Irving Howe	1966
(6)	The Great Web	Ian Gregor	1974
(7)	Lawrence, Hardy and American Literature	Richard Swigg	1974
(8)	Thomas Hardy and D.H. Lawrence	Suman P. Prasad	1976
(9)	Thomas Hardy: After Fifty Years	Lance St John Bulter	1977
(10)	New Women in the Late Victorian Novel	Lloyd Fernando	1977
(11)	The New Woman and the Victorian Novel	Gail Cunningham	1978